

イギリスへ渡った茶 (12)

富 山 八 十 八 (とみやま やそや)

華咲いた紅茶文化

ヴィクトリア時代 1837年、ヴィクトリア女王は18歳でイギリスの王位につき1902年崩御まで61年間君臨した。この時代は「パックス・ブリタニカ」（英国による平和）ともいわれ1914年の第1次世界大戦までイギリスが世界をリードした。イギリスが地球の1/4を植民地として支配し君臨できた背景には世界に冠たる海軍力があつた。

前世紀の後半から1830年頃までイギリスは産業革命によって「世界の工場」となり、それによる富の集中によって今度は「世界の銀行」として世界各国へ投資し利子収入などによって繁栄が維持された。

1846年に地主階級の利益を保護してきた穀物法が廃止され、1849年には航海条例が撤廃されて貿易・海運の自由化が進んだ。イギリスは海外から食糧の輸入によって食糧価格は低下し、海外から輸入した原材料を工業製品に仕上げ輸出した。

1830年にマンチェスター＝リバプール間に鉄道が開通し30～40年代に鉄道投資熱を起し国内の鉄道網は完成した。

1851年、大英博覧会が開催された。これは第1回万国博覧会でもあつた。アルバート殿下が企画から運営まで当つた。

ハイド・パークに鉄骨とガラスで造られた間口575メートル、高さ30メートルの巨大で華麗な建物「クリスタル・パレス」が人びとを驚かせた。トーマス・クックが始めた鉄道と博覧会入場のパックスツアーは大人気だつた。140日間の会期中に400万人が来場したが、これは当時のロンドンの人口の2倍に相当した。

博覧会はイギリス繁栄の象徴であり、この頃より国民が豊かになりイギリスは大衆化社会を迎えることになる。

産業革命を終えたドイツとアメリカ合衆国の

発展はめざましくイギリスに挑戦してくる。

1873～96年の間、2度の好況期を除いてイギリスは長い不況に見舞われる。物価は低下し、企業利益は減少した。1896年によく不況を脱するが、ドイツ、アメリカに比べて経済地盤の低下は覆うべくもなかつた。

1867年と1884年の選挙法改正で成人男子は普通選挙権をえて政治の民主化が実現、1896年に労働党が誕生した。イギリスは社会的弱者を救済する福祉国家への道を歩み始める。

社会階層の変化 産業革命によってイギリスの社会には上・中・下の3階層が生まれた。

上層階級：貴族とジェントリー（爵位を持たない大土地所有者）で人口の2～3%。彼らの収入は地代や利子で労働の対価ではないので「レジャー階級」ともいわれた。

中層階級：ブルジョアジーと専門職で人口の24%。ブルジョアジーは工業、商業、金融、農業などの経営者。専門職は従来からの弁護士、医師、聖職者、高級官僚、高級軍人などの職業に19世紀には各種技師、建築家、会計士などが加わる。この階層は自らの努力、創意工夫と機会によって収入を開くヴィクトリア朝の時代精神を体現するものといわれた。平均年収は300～100ポンド。召使を雇うことが中流のステータスシンボルだつた。

ヴィクトリア時代には彼ら独自の思想や道徳、文化が根を下ろした。キリスト教の福音主義運動に熱心だつた。

労働者階級：人口の64%。年収は57～78ポンドで平均的中層階級の1/5。「労働貴族」といわれた熟練工は年収80～100ポンドで中流の下層と年収は変わらない。

貧困層：年収10ポンド強で人口の11%。19世紀末のロンドンとヨークでは30%だつた。

■ 19世紀後半の賃金などの指数の変化

年	実質賃金	小売物価	生計費
1860	51	111	113
65	58	107	114
70	60	113	110
75	70	113	115
80	69	107	105
85	81	96	91
90	92	91	89
95	100	84	83
1900	103	89	91
14	100		100

資料：長島伸一『世紀末までの大英帝国』
(法政大学出版局、1987年)より

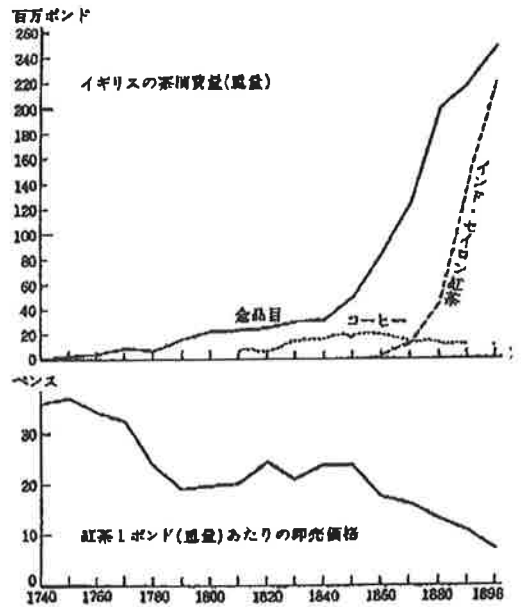
この表はヴィクトリア時代の繁栄期である大英博覧会の翌年からヴィクトリア時代の実質的終わりといわれる第1次世界大戦までの半世紀の動きである。①実質賃金は倍増、②小売物価は1885年から低下、③生計費は85年より余裕が出てきてみなが豊かになっていった。

第2次食事革命 重商主義的な諸規制の撤廃、輸入関税の軽減または廃止によって貿易の自由化が進み、汽船や鉄道の発達で輸送費が下がった。アメリカの安い小麦粉でパンの値段が下がり、缶詰や冷凍技術の進歩でオーストラリアの羊肉、アルゼンチンの牛肉が安くなり、トマトが食卓に上がるようになった。18世紀初めの商業革命期での食事革命は主として上流階級の食卓に変化をもたらしたが、19世紀の第2次食事革命は労働者の食卓まで豊かにした。

増加するイギリスの紅茶消費

イギリスの茶輸入の急増は1785年のピット首相が茶税を1/10に下げたときだった。次いで19世紀に入ってから茶税の低下や1864年のインド紅茶、1884年のセイロン紅茶の登場などで価格が下がり消費が急増した。

1903年のイギリス輸入紅茶の国別内訳は、インド55.4%、セイロン30.1%、中国7.7%、ジャワ6.8%で、かつて100%だった中国茶は大きく後退し、インド、セイロンなどイギリス人が経営する茶園のものがほとんどを占めるようになった。かくてイギリスは紅茶の生産から輸送、流通、販売までのすべてを支配することになったのだ。



(加藤祐三、1979)

資料：加藤祐三『イギリスとアジア』岩波新書、1980年より

イギリスの紅茶輸入量と1人当たり消費量

年次	純輸入量	1人当たり消費量
1801	10,764 トン	0.68 kg
1821	12,136	0.57
1851	24,471	0.88
1871	61,476	1.79
1881	72,678	2.10
1901	117,413	2.78
1911	133,932	2.95

資料：International Tea Committee, Londonから
ベドフォード侯爵夫人が始めたといわれるアフターヌーン・ティーの習慣が1870年代から一般庶民にも広く普及した。中流以上の家庭では社交的な意味も持ち、女性はアフターヌーン・ドレスやティー・ガウンを着用した。

茶税 茶価格の低下には1834年からの引き続く茶税の低下もあった。そして第1次大戦後の1929年について茶税は廃止された。チャールズ2世以来実に269年振りのことだった。

余暇と百貨店 1867年の工場法で土曜半日制が全工場で実施され「ウィーク・エンド」の言葉が生まれた。1871年には年4回の銀行休日を実施され余暇時間が広まった。

レジャーとしてピクニックが流行し人びとは

野外でピクニック・ティーを楽しんだ。

1868年にロンドンに百貨店のホワイトリーが開業、その成功で百貨店が次々と開店してゆくと紅茶売場は人気の売場だった。

紅茶会社 イギリスの紅茶消費は19世紀中葉から急増し、紅茶会社の設立も後半期に激増している。紅茶会社の設立は18世紀に17社、19世紀前半に23社、後半は59社である。

Twining トワイニング 1706年の「トムズ・コーヒーハウス」に始まる。1717年頃女性も入ることができる「Golden Lion」で茶、コーヒーを販売する。19世紀に一家のTwiningの名前で包装紅茶を出した。

Fortnum & Mason フォートナム・メイソン 宮廷女官だったフォートナムとメイソンが18世紀初めに上流顧客を対象とした高級食料品を始めた。1756年に店舗はピカデリーに移った。

Melroses メルローズ 1812年設立。アンドリュー・メルローズはスッコランドのエディンバラに食料品店とティーショップを開いた。1833年イギリス東インド会社の中国貿易独占が終わると早速、現地へ人を派遣して中国茶を直接スコットランドに輸入、各地から人を集めてオークションを行った。

Horniman ホーニマン 1826年設立。クエーカー教徒のホーニマンがワイト島で包装紅茶を売り出した。当時茶は店頭での計り売りで、ニセ茶が混ぜられることもあった。彼は工場で包装茶にすることで純正紅茶を保証した。包装紅茶のはじまりといわれる。

Tetley テトレイ 1836年設立。ジョセフ・テトレイが兄弟と包装紅茶の製造販売を始め、テトレイ・ブラザース会社として発足した。その後ニューヨークにも進出した。

Harrods ハロッズ 1849年設立。現在イギリスの代表的百貨店であるが創業はヘンリー・ハロッズが始めた食料品店で紅茶は主要アイテムだった。2代目のチャールズが1868年にデパートメントストアに店を変えた。店内に紅茶のブレンドと包装設備をもち、包装紅茶を販売した。

ABC 1862年設立。ロンドンでのティールームのパイオニア。特許をとった特殊製法のパンの店頭での試食宣伝に紅茶をサービスしたことから紅茶サービスの提供が主な業務となった。

COOP コープ 1863年設立。生活協同組合運動は数人の織物工によって1844年に始まった。1863年に数組合が連合し仕入れ機構を結成した。そこで包装紅茶を取扱い、イギリスの大手紅茶業者の一つとなった。

Brook Bond ブルックボンド 1868年、アーサー・ブルックは24歳で卸売商の父から独立してマンチェスターで紅茶店を開いた。当時は計り売りが主で品質も価格も日によって変わったが、アーサーは紅茶をブレンドすることで品質と価格の一定を保証して信用をえた。自動車が登場するといち早く配達用馬車に替え、騒音を出して走る自動車が「配達が早いので品質が新鮮だ」との評判を呼んだ。インドで茶園経営にも乗り出す。

Lipton リプトン 1876年、トーマス・リプトンはグラスゴーで食料品店を開き、やがてマルチプル・ショップを展開、1929年には全英で590店、うちロンドンに100店あった。

セイロンの茶園を手に入れ紅茶生産も行い、「茶園から直接ティーポットへ」のキャッチフレーズで包装紅茶の製造販売を行った。

1893年アメリカでSir, Thomas, J. Liptonを製造販売する。1898年ヴィクトリア女王からナイトに叙せられる。ヨットの世界レース「アメリカン・カップ」に4度出場した。

紅茶文化の波及 17世紀中葉にコーヒーハウスとイギリス宮廷から飲まれ始めたアジアの茶は、時代とともに下の階級へ波及していった。

イギリス人にとって喫茶の風習はジェントルマンのライフスタイルの表徴だった。豊かになった階層がそれを採り入れて行き、繁栄のヴィクトリア時代には全国民のものとなった。紅茶文化の垂直的波及といえよう。

「ボックス・ブリタニカ」の時代、7つの海を征したイギリス人は植民地にも喫茶の風習を持ち込み、彼らと接触する現地の人びとがそれを採り入れて行った。また大英帝国の文化を表徴するひとつとして植民地外の国にも波及していった。紅茶文化の水平的波及といえよう。

訂正とお詫び 2月号の[11]の「紅茶の生産—セイロン」で、ポルトガルの支配1658年は1505年に、オランダの支配1796年は1658年に訂正してお詫びします。